八尾市教育センターNEWS

令和6年7月
所報： 399号

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから

『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～

【「わたし、かわいいでしょ！」～子どもの得意なことを遊びに取り入れるわけ～】

５月３１日（金）、４歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

保育室の一角で、黙々と遊ぶ A 児とB児がいました。A児は、小さな折り紙でハートを作っていました。折り方がとても丁寧でした。そして、できたハートを２個つなげて、自分の右そでに付けました。よく見ると、胸のところにもすでに色違いのハート折り紙が付いていました。それを見て、思わず「かわいいね！」「折り紙折るの、上手だね！」と声をかけました。すると、一瞬顔を上げ、「うん」とうなずき、また折り紙を折り続けていました。すると、横でブレスレットを作っていたＢ児が、「みてみて！」「これはどう？」と話しかけてきました。「いいね～」「どうやって作ったの？」と聞くと、「これを細長くして、ここにキラキラをつけて、腕に巻き付けるの」と嬉しそうに教えてくれました。さらに、「ここはね、作ったものを置いておく場所やねん。自分の顔があるところに置くねん」「これは、つめに付けれるねん。違うのに変えたりもできるねん」と遊び場所の解説をしてくれました。作ったら終わりではなく、遊びが続く工夫と、『もの』を大切にできる環境が整っていることに、保育者の思いを感じました。

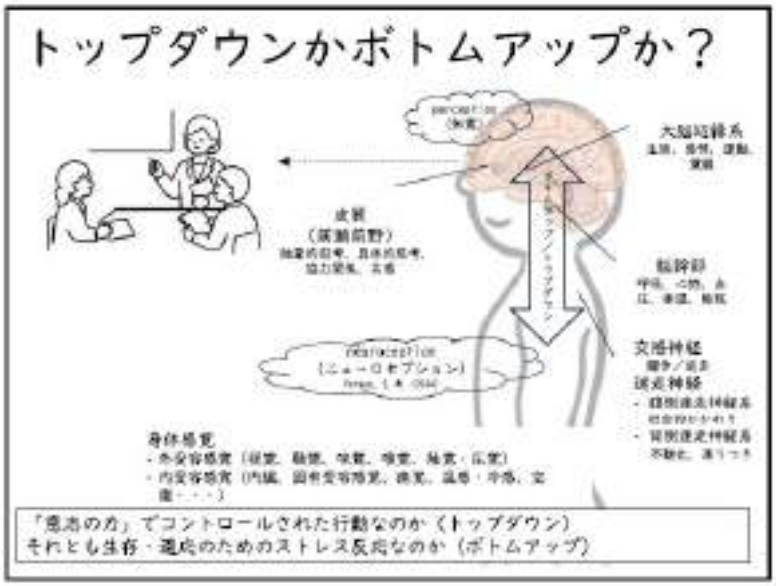
そんなＢ児と私との会話を横で聞いていたＡ児が、左そでにハート折り紙を貼り付けて、「できた！」と私の方を見て伝えてきたので、「おお！ステキやね～。色も揃っていておしゃれやわ」と声をかけました。

すると、Ｂ児が「Ａちゃんは折り紙が得意やねん。だから、かわいいのん、たくさん作れるねん！」とＡ児のことを自分のことのように話してくれました。Ａ児もにこっと笑いながら、次は何をつくろうかな？と考えている様子がありました。きっと、Ｂ児に認められ、Ａ児の「もっとかわいくしよ！」という気持ちが、『できること（得意なこと）』から『イメージしたもの（新しいもの）をつくろう』とする遊びへの意欲につながったように思いました。

これまでの『メイクごっこ・つくって遊ぶ』遊びから、『アクセサリーやさん』や『おしゃ

れコーナー』など、名前を変えて遊びがどんどん発展していきそうにも思いました。
　自分の『つくったもの』や『発案した遊び』が認められることは、自信になり、さらなる遊びの意欲や新たなものを見出そうとする思考力にもつながっていきます。
　そして、「教えて！」「作ってほしい」などの友だちからのオーダーがきたら、A児はどうするだろうか？「〇〇つくりたいから、△△の材料ほしい」と自ら、先生に要求する姿も出てくるのだろうか？など、今後の遊びの展開も楽しみになりました。
　【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】では、『健康な心と体』に大きくつながるエピソードでした。今後、この遊びが発展し、友だちとのかかわりも増えてくれば、『自立心』『協同性』『社会生活とのかかわり』『思考力の芽生え』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』の姿にも関連していきます。

５年経験者研修③



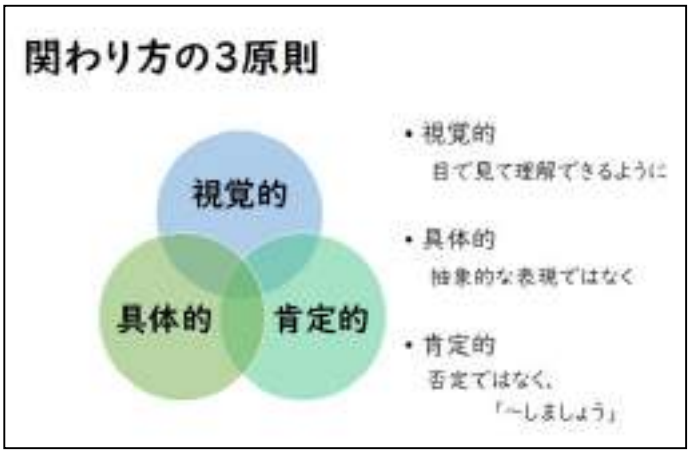
　令和６月４日（火）午後３時～午後５時に５年経験者研修③を行いました。講師は奈良教育大学の　粕谷　貴志　教授で、研修テーマは「児童生徒・保護者の理解と発達を支える指導・助言」です。

←研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞
・本日の研修を受講し、これまで私が出会い、対応に悩んだ児童の姿が思い浮かんだ。突然スイッチが入ったように暴れてしまう子、頑なに自分のしたことを認めない子。そんな子どもたちの行動を、冷静に分析し効果的に対応していきたいと思ってきた。今まで、「こうした方がうまくいくな」と漠然と感じていたことも、理論的に説明していただけたことで、明日からの教育実践の中で活かしてことができそうである。
・子どもの話を聴くことは心掛けていたつもりだったが、３つの側面で子ども一人ひとりを分かろうとする視点はっきりと持てていなかった。特に、心理面の発達を支援することの重要性が印象に残った。【ありのまま】の姿を受容し、テストの点数が低くても、運動能力が低くても、がんばった過程を褒める・認めることが大切だと思った。社会的スキルに関しても、正しい対人関係を教えることも大切であるので、褒める叱るということにとらわれすぎずに、存在そのものを認めるように心がけていきたいと思う。
・安心感、信頼感から育てるという意識は十分持てていなかった。「治そうとするな、分かろうとせよ」と最後に書かれたが、私自身は治そうとすることが多かったと思う。相手のことを理解して安心感を与えられるような教室にしていきたい。また、保護者にも同様に対応すべきとのことだが、基本的信頼を構築していくことが重要であるということが実感できた。

幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修①＞

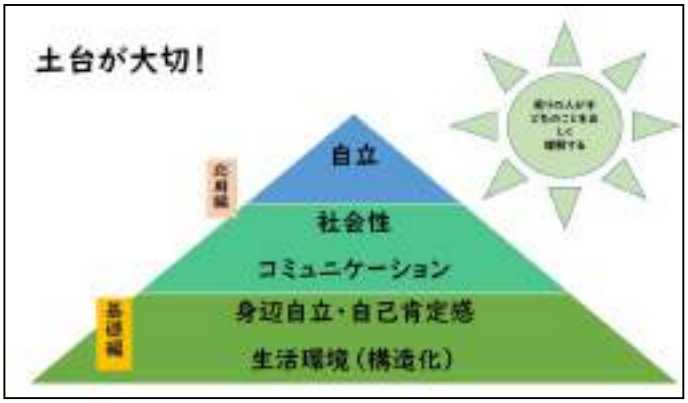
　令和６年６月５日（水）午後３時～午後５時に幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修①＞を本市青少年センターで行いました。講師は社会福祉法人北摂杉の子会こども発達支援センター　Will センター長　新谷　沙弥香　さんで、研修テーマは「今日から実践！子どもの行動理解と支援方法～社会性・コミュニケーションの視点から～」です。



↑研修で使用したスライド資料の一部→

・「土台が大切」というお話が、とても印象に残った。園に持ち帰って協議し、生活環境を構造化していきたい。
・他園の具体的な支援方法の紹介がとても参考になった。スモールステップで実践していきたい。

＜受講者感想＞
・子どもの行動をよく観察し、子どもの背景や困りごとを考えることの大切さを知ることができた。今まで以上に意識を高め、日常の保育に活かしていきたい。
・「ちゃんとして」「もうちょっと」など絵に描けないような言葉を使ってしまっていることに気づかされた。もっとわかりやすく、具体的な言葉遣いをするよう気をつけていきたい。



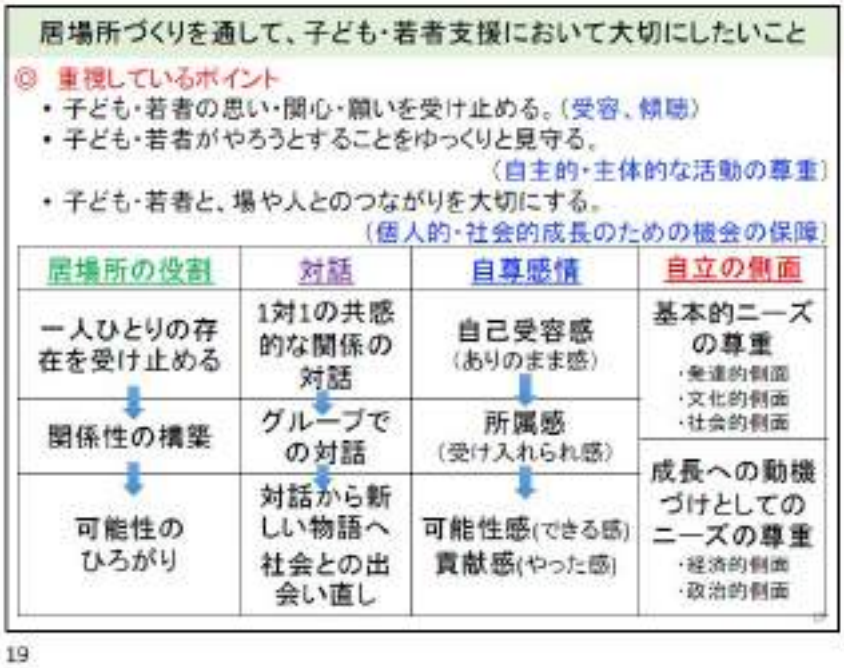
初任者研修④（授業づくり２　水泳指導研修）

令和６年６月６日（木）午後２時～午後５時に初任者研修④（授業づくり２　水泳指導研修）を八尾市立屋内プール「しぶき」で行いました。水泳指導の安全管理等については事前に研修動画「プールの安全確認と監視について」は前回研修（５月９日）にオンライン（リアルタイム）で視聴しています。当日は実技指導中心で、講師は株式会社東京アスレティッククラブの　田代　永起　さんと丸山　浩　さんです。研修内容は「水面監視、プールサイドでの AED について」「バタ足・クロール、平泳ぎ」です。

←八尾市立屋内プール「しぶき」

＜受講者感想＞
・水質管理においては、塩素の量が少ない場合、大腸菌が発生してしまうということを学んだ。もちろん高ければよいというものではないので、適正な塩素濃度になるよう気を付けていきたい。また、水面監視役の場合、死角があることに注意しなければいけない。また光の水面反射にも気を付けていきたい。AED の講習では、機材によって音声アナウンスやパッドに違いがあるということを知ったので、自校の機材の内容を確認しておこうと思う。
・水泳指導中の指導ポイントや補助の仕方について学んだ。児童に伝えるポイントや指導時の工夫などを実践しながら取り組むことができ、水泳指導をする際に活用していきたい。また、監視方法や意識、危険な場での対応など、事故は起こるものだと考えて、指導に取り組む姿勢が重要であると感じた。そのため、今回の研修を生かし、児童の安全を守りながら、水泳指導を充実させたいと思う。
・「5 秒目を離している間に、人が死んでしまうことがある」という言葉が頭から離れない。それだけ児童の様子を常に注意して見ていかなければならないと、改めて感じた。

首席・指導教諭研修



令和６年６月７日（金）午後３時～午後５時に首席指導教諭研修を行いました。講師は奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任教授、子ども・若者支援専門職養成研究所代表　生田　周二　さんで、研修テーマは「不登校・ひきこもり状態の児童生徒および保護者支援、関係構築について―居場所ねいらくの取り組みから―」です。

←当日使用したスライドの一部

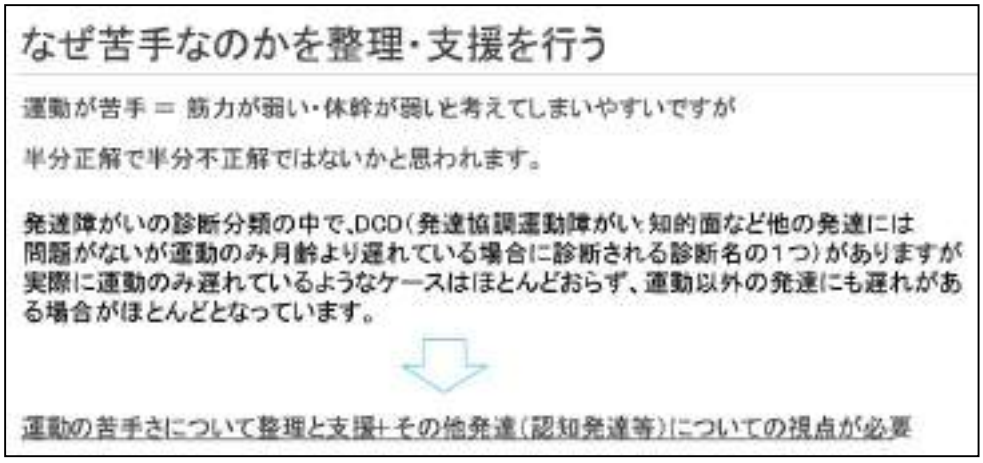
＜受講者感想＞

・学校で出来る不登校支援の話が心に残った。まずは子どもと良好な関係を築くことが大切であり、学習支援や進路指導は次のステップと捉えていくことがわかった。家族や教員をはじめとする周りの大人は、ともすればこれが逆になりがちなので気を付けていきたい。

・児童の自尊感情を高めることの大切さを学んだ。学力を高めることも大切であるが、まずはその前段階の安心できる居場所作りがとても大事だということを学んだ。また、本人が自己決定し自らの力で切り開いていくということが大切で、教師が焦って選択を迫らないように心掛けないといけないと思った。

・不登校の子どもたちは、心のエネルギーを貯めると、自分からもう一度動こうとするようになる。関わる大人は、子どもの力を信じ、居場所となって心のエネルギーを貯められるように見守っていくことが大切だとわかった。また、一見怠けているように見えてもそうではなく、これまでのストレスからそう見える行動をしているだけで、本当は子ども自身がしんどい思いをしている。よかれと思って登校刺激を与えることは、かえって逆の効果になりかねない。子どものありのままの姿を受け入れ、心のエネルギーを貯めるのを待っていこうと思う。

特別支援教育・保育ゼミ　全体研修①



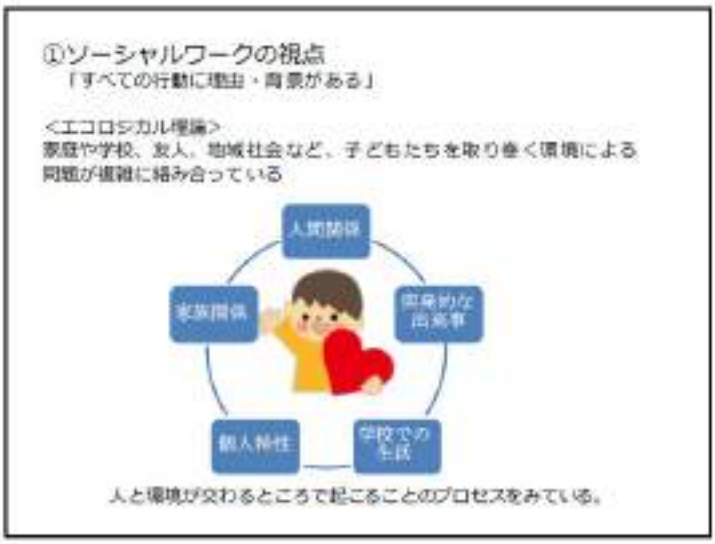
↑研修で使用したスライドの一部

令和６年６月１０日（月）午後３時３０分～午後５時に特別支援教育・保育ゼミ　全体研修①を本市青少年センターで行いました。講師は本市児童発達支援第１センター作業療法士　岸本　和也　さんで、研修テーマは「運動が苦手な子どもへの支援について～支援の視点と方法についての一例～」です。

＜受講者感想＞

- 「感覚の過敏さ等によって積み重ねに影響を及ぼすこと」が分かった。運動の経験にも偏りがあるという視点で「一部分だけでも参加し成功の経験を積む」ことを意識したい。すぐに取り入れられる運動を具体的に知ることができたので、自園でも取り入れていきたい。
- 遊びの中で自然に少しずつ経験でき、一緒に保育者も参加しながら、苦手なものに取り組み、少しずつ背中を押し成功できれば自信につながることが大切だと感じた。
- 運動を苦手としている理由を多角的な視点で捉え、それに即した支援（遊び）を提供していきたい。

３年次研修



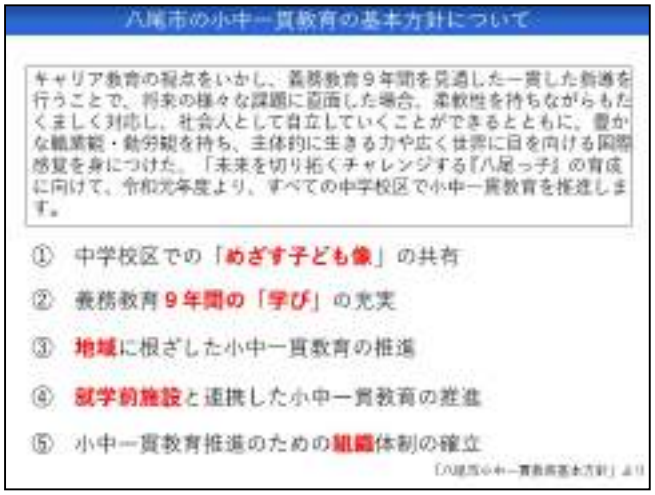
令和６年６月１１日（火）午後３時３０分～午後５時に３年次研修を行いました。講師は本市ＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）ＳＶ（スーパーバイザー）の　郭理恵　さんで、研修テーマは「学校教育相談」です。

←研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- 生活課題を抱える子どもについてスクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）の必要がわかった。宿題ができない、忘れ物が多い、遠足で弁当の準備が難しい、諸費の未納、医者への受診が行われない、などの子どもの様子を見かけることはあるが、実際どうすればいいのか戸惑うことがある。今後 SSW に相談したり、子どもの背景を考えたりするようにしていきたい。
- 「児童がどれだけ大きな問題行動をしたとしても、その背景には必ず何かの理由がある。その背景を子どもから聴き出したり、たずねたり、探ったりすることが必要である。」という郭先生のお言葉を常に胸に留めておきたい。
- 実際に SSW の考え方や理論に基づいてどのように事案に対してアセスメントを行うのか知れたことが非常に良かった。また、模擬アセスメント等もこのように行っていくのかと実感できた。アセスメントをしていく中で、実際の生徒像と照らし合わせて考えていくことが興味深かった。

小中一貫教育担当者研修



令和６年６月１２日（水）３時３０分～午後５時に「小中一貫教育担当者研修」を行いました。講師は本センター　西田　朋広　主査で研修テーマは「各中学校区の小中一貫教育の取り組みについて」です。

←研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞
Q：中学校区で９年間を見通した教育を行うために必要なことはどのようなことと考えますか。ご自身のお考えを書いてください。

- 中学校区で密な情報共有が必要であると思う。また同じ目標に向かって子どもを育てていくことも大事であると考える。
- 一部の教員だけではなく、校区で勤務するすべての教員が、他校の取り組みや児童の様子に関心を持ち、日々情報の共有が行われることが大切だと考えます。

Q：本日の研修で印象に残った他の中学校区の取り組みは、どのようなことがありましたか。

- 小６だけではなく、４年や５年も中学生と交流するというのは、長期的に小中が関われるので、より効果的な取り組みだと思った。
- 眠育の活動が印象に残った。１５分ほどの睡眠はその後の活動の効率があがるので効果的なのではないかと思った。

初任者研修⑥ICT 研修

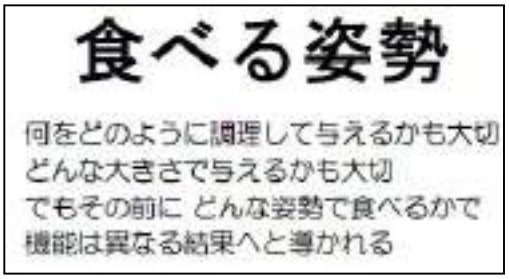
令和６年６月１３日（木）[中学校]と６月２０日（木）[小学校]の午後３時～午後５時に初任者⑥ICT 研修を行いました。講師は本センター　生田　祐敬　指導主事で研修テーマは「学校ＩＣＴ研修～学びを深めるための効果的な ICT 活用～」です

←研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- 学校に勤務するにあたり、そもそも個人情報とは何かから始まり、それらを取り扱う際の留意点などを学ぶ事ができた。また、イラストを用いたワークから些細なことも漏洩につながる可能性があると知り、今後の情報の扱い方を気を付けようと思った。また、著作権については教育利用だからなんでも OK ではなく、法律に則りきちんと正しく授業で取り扱う必要があるなと理解できた。著作権はコロナ禍で変化したこともあり今後も法改正がされる可能性があるので常に敏感に対処していくことが重要だと考える。
- ロイロノートを活用した保健教育や保健管理を実施したいと考えていたので、実際に触りながら学ぶことができて、様々な可能性を感じた。子どもたちが楽しく、また、わかりやすい保健教育や保健管理ができるようになりたいと思った。また、情報に関する危機管理の講義はすごく参考になった。保健室にはたくさんの個人情報が集まってくるので気を付けたい。
- 個人情報の取り扱いについて、「私は大丈夫！ではない。」という言葉が、とても印象に残りました。自分の受け持つクラスの個人情報はもちろん、学校や地域のことなど、自分は学校組織・八尾市職員の一員であるという自覚をもって、引き続き細心の注意を払っていこうと思います。

幼児教育研修＜健康及び安全研修＞



令和６年６月１３日（木）午後３時～午後５時に八尾市水道局大会議室で幼児教育研修＜健康及び安全研修＞を行いました。講師は医療法人西川歯科　西川　岳儀　理事長で、研修テーマは「口と姿勢の発達から考える健康づくり～生命活動の３S-息育・食育・足育～」です。

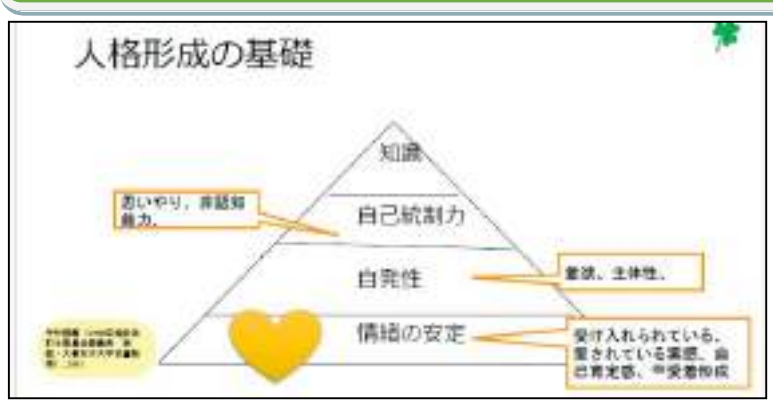
←研修で使用したスライドの一部

使用したスライドの一部→

＜受講者感想＞

- 何気なくしていたことが実はとても大切なことだと実感した。椅子の高さが適正で、足がしっかり床面についているのか、脇をしめて食器を持っているかなど、意識して観察し、必要に応じて指導していきたい。
- 栄養士として、献立を立てるときに、少しでもかむ力が育てばと思いカミカミメニューを入れるように心がけているが、食べ物の硬さではなく食事環境が大きく関係していることを知り、固定概念が覆った。
- 靴の履き方で、「踵トントン」の履き方をすると体軸が安定するということが体感できた。

幼児教育研修＜キャリアステージ研修②＞



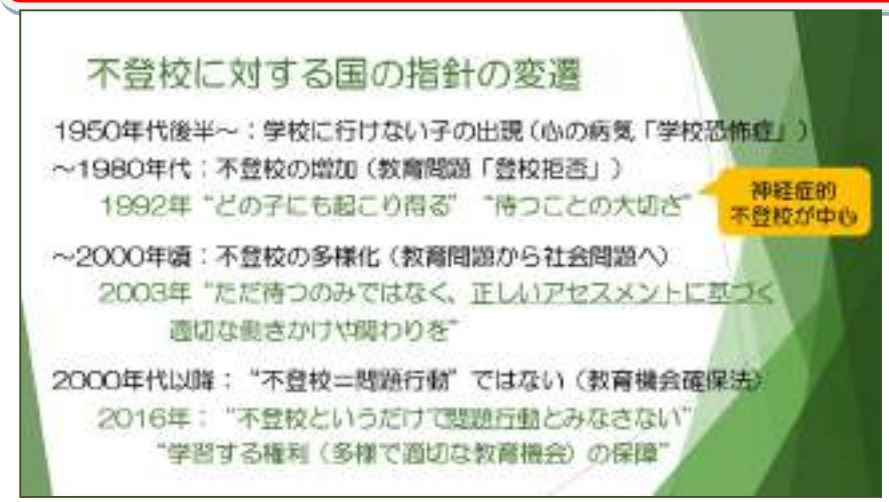
令和６年６月１４日（金）午後３時～午後５時に幼児教育研修＜キャリアステージ研修②＞を八尾市水道局大会議室で行いました。講師は大阪総合保育大学の　石丸　るみ　准教授で、研修テーマは「主体性と意欲を育む乳児保育とは」です。

←使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- 人格形成の基礎は情緒の安定→自発性→自己統制力→知識ということを学び、なによりも情緒の安定が育っていない、満たされないと次につながらないので、日々の保育で意識していきたい。
- できる限り、子どもの気持ちを受け止め、できない時は言ってもわからないだろうではなく、乳児でも言葉で伝えることが必要であるということが分かった。
- 子どもの不安を取り除くために、快適に過ごせて安心できるような保育を心がけていきたい。

教頭研修②



令和６年６月１７日（月）午前１０時３０分～午前１１時３０分に教頭研修②を行いました。講師は奈良教育大学の伊藤　美奈子　教授で、研修テーマは「不登校児童生徒・保護者の心理とその支援」です。

←研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- 不登校の対応が時代とともに変わっていくことを理解できた。多様な学び方を認め、校内や校外でも居場所を作っていくという、今の対応を有効活用していこうと思った。また、１０年後の不登校の対応はどう変容していくのか見極めていきたい。学び方が多様化していくことが浸透すれば、不登校という言葉自体が変わっていくように思う。
- 不登校児童はもちろんのこと、不登校児童の保護者も支えることで、不登校児童が変わるきっかけになるという話を聞いて、あらためて考えさせられた。家庭を孤立化させないということを大事にしていきたいと思う。
- 不登校の児童、保護者に寄り添うことの大切さは理解していたつもりではいたが、多様化している今の時代における不登校の現状を捉え直す貴重な機会となった。アセスメントの重要性、しかも専門家も含めた複数の職員による丁寧な見立てや見極めを行い、一人ひとりに合った関わりを行っていくことの大切さを学ぶことができた。

小学校「外国語活動」「外国語」授業づくり研修①

令和６年６月 17 日（月）午後３時３０分～午後５時に小学校「外国語活動」「外国語」授業づくり研修①を行いました。講師は関西大学　竹内 理 教授で、研修テーマは「外国語の授業におけるパフォーマンステストの充実～ルーブリックの作成を通して～」です。

＜受講者感想＞

- 今まで、自分がやってきた逆向き設計による授業スタイルの方向性が一致していて良かった。。またルーブリック評価の具体的な作り方や、観点を絞って作成しても良いということを知った。年間とおして見取っていくというスタイルでも良いということを知ることができ、とても勉強になった。これからの授業づくりや評価づくりに活かしていきたいと思う。
- ルーブリックを児童と共有することのメリットが、思っていた以上に多く、今後の授業づくりに生かしていきたいと思った。また、B（Pass）から考えることで、自分の中でも評価の基準・規準が明確化され、授業を考えたり、児童にアドバイスをしたりする場合にも役立つと感じた。
- ルーブリックの作成を通して、評価はシンプルにすることが大切だと分かった。また、B の評価から考え、それをもとに A,C の規準を考えていくということも知り、実際に作成を通してその意味を理解することができた。校内に持ち帰り、正しく子どもたちの評価ができるように頑張っていきたい。

「音楽」授業づくり研修

令和６年６月１８日（火）午後３時３０分～午後５時に「音楽」授業づくり研修を行いました。講師は兵庫教育大学　河邊　昭子　教授で、研修テーマは「教師と子どもがともにつくる音楽科授業をめざして―合唱指導を例として―」です。

↓研修で使用したスライドの一部

１　自然で無理のない歌声で歌うために

（１）話し声と歌声の違いを知ろう

・歌声は「大きな声」ではなく「響きのある声」

×「声が小さい！もっと大きな声で！！」「大きな声で歌いましょう」

○「遠くに声を届けましょう」「息をしっかり吸って歌いましょう」

↓↓↓

「声」ではなく「息」への意識を高める

＜受講者感想＞

- 実際に自分も歌ってみて、初めて聴く曲を歌う時の心境や、輪唱をし、音が合った時の感動も分かり、児童の気持ちが少し理解できたように思います。まずはいろいろ試してみて、自分にも児童にも合うやり方を見つけていきたい。
- 合唱における声の出し方、斉唱の重要性、歌声や歌い方を自覚すること、音の重なりや音楽の縦と横との関係に着目した活動、曲想と音楽の構造との関わりを活かした合唱指導の工夫など、実際の教科書に掲載されている曲を使って教えていただき、わかりやすかった。早速実践していきたい。
- 小学校の低学年で、合唱を楽しく学習するのに悩んでいた。子どもたちは大きな声で歌うが、きれいな声で歌いましょうと言っても伝わりにくかった。今日の研修で息に意識して遠くに伝えるや、声を手の上にのせるや、遠くの点を目指して届けるなど、声のかけ方が参考になりました。子どもたちと一緒にプレイヤーとして授業することを心がけていきたいと思う。

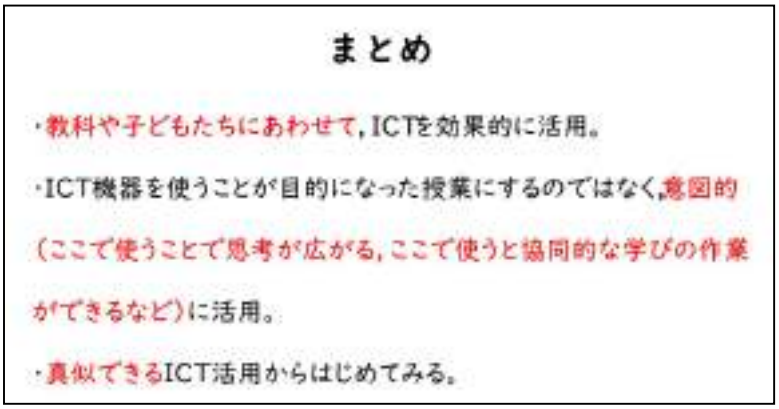
食育の授業づくり研修

令和６年６月２１日(金)午後３時３０分～午後５時に食育の授業づくり研修を行いました。講師は株式会社明治管理栄養士さんで、研修テーマは「成長期の運動と水分補給について」です。

＜受講者感想＞

- 成長期の運動と水分補給ということでそれぞれに大切なことがよくわかった。中学校向けのスライドだったが、小学生にも当てはまるものなので、ぜひクラスの子どもたちにも今日学んだ内容を伝えていけたらと思う。
- ７月の「ほけんだより」で汗について取り上げようと思って勉強している。熱中症がこれから増えてくるため、子どもたちに熱中症にならないために防止活動を行おうとしている。今回の研修内容は、熱中症にならないように気をつけないといけないことがたくさん含まれていたので参考にしたい。
- 小学校で勤務していて、熱中症には日々細心の注意を払っている。今日の研修を受講して、適切な水分補給の大切さを再確認した。また、給食の牛乳が改めて必要な飲み物であると感じたので、一口でも多くの牛乳が飲んでもらえるように声かけを頑張っていきたい

ICT 活用研修②



←研修で使用したスライドの一部

令和６年６月２５日（火）午後３時３０分～午後５時に ICT 活用研修②を行いました。講師は本センター　生田祐敬　指導主事で、研修テーマは「ICT を効果的に活用した授業展開例の紹介等」です。

＜受講者感想＞

- ICT 機器の「使用」ではなく「活用」していけるように、自分自身の教科指導に活かしていきたい。またゲームモードなどを使って、生徒を飽きさせないように授業展開を心掛けたい。
- ロイロノートの活用方法が更に分かった。シンキングツールを日常的に活用していきたいと思った。これからも ICT 機器をさらに活用して授業を行っていきたいと考えている。
- 生徒の興味関心を引きだす方法を知ることができた。テスト機能を有効に使えば、クイズ形式で出題するとができ、生徒の集中度も高まるものと思われる。

保健教育研修

令和６年６月２７日（木）午後３時３０分～午後５時に保健教育研修を行いました。講師は私のための保健室　てとて　代表　道原　舞　さんで、研修テーマは「性の知識をアップデートしよう～包括的性教育について～」です。

＜受講者感想＞

- 子どもたちが「不快」を知るには、「心地よさ」を知らせてやるといい、ということを学んだ。そこで、保護者にはわが子をハグすること、抱っこすることを推奨したい。教員には、「心地よさ」を言葉として伝えることを推奨し、子どもたちの「心地よさ」を知る機会を増やしていきたい。
- 「包括的性教育」という言葉は新鮮であった。性犯罪の被害にあった児童や生徒のことを振り返ると、自尊感情が低くかったり、家庭の状況がしんどくて寂しい子が多かったように思う。体や生理の仕組みを教えるだけでなく、自分を大切にする気持ちを教えることの必要性を感じる。
- 性に関する言葉をふざけていう子どもが時々いる。そこに性的虐待などが隠れているという視点は大切だと感じた。これからは「どこで知ったの？」「誰から聞いたの？」ということを聞いて情報を集めることが大切だと思う。この数年で校区での情報交流から、卒業生のSNS を使った性に関する問題が急に増えたので、最後に教わった性犯罪について、子どもたちが加害者にも被害者にもならないように、またどのようなことが犯罪になるのかなど正しい知識を学び伝えていきたいと思う

通級指導教室公開授業研修

令和６年６月２８日（金）午後３時～午後５時に通級指導教室公開授業研修会を行いました。講師は般社団法人 発達支援ルームまなび 理事・日本ＬＤ学会 特別支援教育士スーパーバイザー　今村 佐智子さんで、前半は通級による指導の授業動画の視聴を行い、後半は講師より指導助言及び講義をしていただいた。

＜受講者感想＞

- （実践報告を観て）１時間の中で子どもたちの課題にあった内容がしっかり計画されていたことがすばらしいと思った。子どもたちのアセスメントを丁寧に行うことが改めて大切だと感じました。
- （実践報告を観て）保護者からの相談を基に活動内容を考えて、準備することが個別の指導につながると思った。課題を掲示することで、児童も視覚的に活動の計画を立てやすくなっていると感じた。出席のハンコ押しを席から離し、ルールを守る中で立ち歩く時間を設定することは、自校でも取り入れたいと思った。
- （講義を聴いて）同じ意図でも方法の選択が異なるという説明を聞き、自己の通級ではどのような選択が必要なのか考えた。さらに、自己決定をどの発達の段階に入れるのかなどアセスメントに基づいた指導が必要だと改めて感じた。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターＢ棟（東側）の２階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も２週間の貸し出しを行っております。今回は６月から７月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「こころの科学」（日本評論社）７月号
・特別企画　「親なき後」に悩むとき

少子高齢化社会が進む中で、「親なき後」の問題は当該親子や支援者だけではなく、社会全体で考えるべき問題となっています。まずは親・子どもの切実な悩み、尽きることのない不安を知ることは何より大切です。この企画では親・子ども、家族（きょうだい）、支援者（医療、福祉、行政、法律その他）に、さまざまな視点・価値観、考え方を持った方が寄稿されています。

なかでも私が興味をひかれたのは弁護士の　松尾　洋輔　さんが寄稿された「『親なき後』を支える法制度とその活用ー弁護士の立場から」です。「親なき後」を支える法制度として「成年後見人制度」を紹介されています。成年後見人制度とは「ノーマライゼーションの観点から、本人の権利擁護のため、障害や病気などで判断能力が不十分な状態にある者に対して、本人の能力が不十分な状態にあるものに対して、本人の能力や希望に応じて、本人の代理や支援を行う法的地位を備えた後見人等を選任する制度」だそうです。職務内容は「本人に判断能力がないか、ほとんどない場合に選任される。成年後見人には包括的代理権が与えられ、日常的な金銭管理、銀行取引、不動産取引、介護・医療に関する契約まで、本人に代わって幅広い法律行為を行うことができる。」とのことです。ただし「婚姻、離婚、養子縁組、離縁などの身分行為や遺言」は本人しかできません。成年後見人には「本人の家族のほか、弁護士、司法書士、社会福祉士等の専門職や、社会福祉法人や社会福祉協議会等の法人」が選任されるほか「自治体が実施する養成研修を受講した市民」もボランティアで法的後見人になり得ます。松尾弁護士は、ご自分が関わられたケースについて解説されています。また、成年後見制度の導入の適切なタイミングで行われることの重要性についても言及されています。その他の制度としては「任意後見人制度」や「ホームロイヤー制度」「民事信託」なども紹介されています。これら法的な制度の有効な活用は勿論ですが、後見人等が「本人を支援するチーム、ネットワークのハブやコーディネータとして、適切なサービスや知見を組み合わせる役割」を果たすことを期待されています。

（葭仲）

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）７月号
・特集１　失敗を恐れる子へのかかわり

「私、失敗しないので」はテレビドラマで聞いたフレーズです。今月の「月間学校教育相談」では「失敗を恐れる子へのかかわり」です。最初の投稿は「雰囲気づくりと場面づくりで挑戦しやすい環境に」というタイトルです。「クラスのこどもたちは担任の鏡」ということで、先生が板書の文字の間違いを子どもに指摘された時の先生の対応しだいで「（挑戦しやすい）雰囲気」ができるようです。さらに「（挑戦しやすい）場面」を作っていくためには「個別的・計画的」に取り組み必要があります。「（挑戦しやすい）雰囲気」の中で「（挑戦しやすい）場面」を設定していくべきとのことです。

二つ目の投稿は「失敗というプロセスの魅力や価値を伝える」です。ここで重要と思われるのは、副題「生徒の失敗を先読みして過度な助言や叱責をしたりすることなく、生徒も持つ力を信じて見守りぬく（待つ）ことができるか、私たち大人が問われているのです。」です。大人（教師）が「見守りぬく」ことが必要です。投稿者は中・高等学校の理科の先生で、「安全上の問題がなければ」という条件付けもされています。

三つ目の投稿は「安心して『わからない』と言える教室にするために」というタイトルです。最初の段落で「赤ちゃんは『失敗』を感じない」と述べられています。「子どもたちの発達は、このような試行錯誤の連続によって支えられています。」とも述べられています。しかし、これを変えてしまうのが「失敗に立ち向かう機会を大人が奪う」という行為です。失敗したら叱るというような行為です。教室でいうと「『できる人？』『わかる人』」とい

う問いかけです。これは「わからない人」「できない人」を追い詰めてしまいます。投稿者は「『困っている子の気持ち、言える？』『どこで壁にぶつかりそうかな・・・。不安を言葉にできる人、いる？』」と問いかけられるそうです。

４つ目の投稿は「失敗を恐れる子どもへの４つのサポート」というタイトルです。①情緒的サポートとは、「話を聞く、声をかける、励ます、なぐさめる、見守る」などで、目的は「子どもが失敗を自ら受け入れるのを助ける」ことです。②情緒的サポートとは「情報提供、アドバイス、示唆などを指し、失敗から学ぶことの大切さについて情報提供する」ことです。③評価的サポートとは「子どもが行ったことについての評価（肯定・意見・比較など）をフィードバックすること」です。④道具的サポートとは、「物品、労力、時間、環境調整による助力など」です。これらのことに気を付けて子どもと接しながら、大人も失敗をおそれないでチャレンジしていくことが大切だそうです。（葭仲）

・特集２　SC・SSW や相談員と協働的な関係をつくるために

「指導と評価」（日本教育評価研究会）７月号
・特集１　観点別学習状況の評価（１）「主体的に学習に取り組む態度」
・特集２　教師の魅力再発見

今月の「指導と評価」では特集２　教師の魅力再発見　を取り上げています。「いよいよこんなことを特集しなくてはならない時代が来たのか」と思ってしまいます。鹿児島大学教育学部の　髙谷　哲也　准教授は教職の魅力を「自律的な成長の機会」があることと、「基本的人権を保障する役割」であると述べられています。しかし現実の教師を取り巻く労働環境は厳しいとのことです。

元と小学校教諭で上級教育カウンセラーの　柳瀬　啓史（やなせ　ひろし）氏は、「教師と子どもが望む『理想の教師像』」というタイトルで、子どもから見て「絶対に譲れない教師の条件」として（１）ひいきをしない―みんな平等（２）勉強がわかる―できるようになる（３）学級に活気がある―本気で行動、これらの条件を満たしながら、児童を信じて尊重しながら牽引することが「教師の魅力」ではないかと仰っています。

東京都公立中学校の　笠（りゅう）　さわ子　先生は、「教師自身が学ぶことで、生徒が輝き、自分の喜びになる」と題しておられます。スクールカウンセラーとであい、心理学を学んだことをきっかけに学びを重ね、生徒への理解が深まるとき、教師という仕事に魅力を感じるとのことです。そんな中で常に心に持っておられたのは①自主的に、②新しい方法や考え方を学び、③個や集団に合わせて工夫し実践する。この三つです。

東京都公立中学校主任教諭の　加藤　みゆき　先生は「子どもたちと共に成長できる教師であるために」と題されています。教師の魅力について「子どもと共に成長できること、教師の成長が子どもの成長に影響を及ぼすことができること」と述べておられます。

東京都立松が谷高等学校の　茅野（ちの）眞規子　校長は「教師になったからこそ、私の人生は豊かになった」と題しておられます。「様々なタイプの生徒や保護者と出会い、彼らの人生の一部にふれさせてもらうことで、私自身の教育観や人生観は豊かになってきました。これからも教師として、人として成長していきたいと思います。」と述べられています。

教師は、人が人を教え育てるという仕事であり、教師自身の成長が必須であるようです。ということは、教師自身が主体的に学び続けるとともに、成長しようとする教師に対する様々なサポートも継続的に行われなければならないと思われます。（葭仲）

「道徳教育」（明治図書）７月号
・特集　Ａと問うな、Ｂと問え！－発問大研究

本誌特集の一環として「スペシャリストが伝授 A→B を叶える　発問づくりの思考転換法」というコーナーがあり、筑波大学附属小学校の　加藤　宣行　先生は「『もし』・・・」を問う」と題して、次の４点の「思考転換法」として提案されています。①結果をひっくりかえす②別の道を提案する③導入時の思考を利用する④友達の思考を吟味する、以上４点です。「教材の力」と称して、あくまでも教材のストーリーのままに、主人公の心に寄り添うべきとの考えも聞かれました。どちらの手法もあるとは思いますが、様々な手法が行われるのはよいことではないでしょうか。

島根県松江市古志原小学校の　広山　隆行　先生は「『教材解釈』が発問を決める」と題して、次の５点の「思考転換法を提案されています。①「道徳読み」をする②「問題づくり」をする③発問をたくさんつくる④オンリーワンの発問を選ぶ⑤ねらいと発問の整合性を確認する、以上５点です。「道徳読み」とは教師が教材を読み込んで、様々な道徳的価値を見つけ出す作業です。教科書に例示された以外に様々な道徳的価値が含まれています。発問は授業のねらいとの整合性を考えて決めていくとのことです。教師自身が教材を道徳的に読み込んで、ねらいを意識した授業を行う。当たり前のようですが、実際にやるとなると、教師自身も道徳的価値に対する理解が必要です。

群馬県前橋市立粕川小学校の　瀬戸山　千穂　先生は「『問い方』のバリエーションを増やして生活と価値を往還させる」と題して、次の４点の思考転換法を提案されています。①現実とのずれを見つけて問いを考える②「why」以外の「４W」「１H」で問う③複文型で問う④具体化して問う、以上４点です。「複文型で問う」というのは、教材の世界と実際の生活が乖離していた場合に、「自分たちの生活のなかにある事実を取り上げて教材の世界と比較して複文型で問い、子どもたちの思考にずれをしょうじさせる」事です。　（葭仲）

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育連盟編集・東洋館出版社）７月号
・特集　わかる・できる！「算数・数学」の指導のアップデート
～成長を実感できる授業へのヒント～
「初等教育資料」（文部科学省編集　・（株）東洋館出版社）７月号
・特集Ⅰ　学校における安全教育の充実
・特集Ⅱ　多様な他者と協働して、共感的な人間関係や
豊かな学級・学校文化を作る特別活動

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）７月号
・特集　個に応じた指導の充実①
＜国語、社会・地理歴史・公民、数学＞

教育科学「国語教育」（明治図書）７月号
・特集　授業を変える１００の技術

教育科学「社会科教育」（明治図書）７月号
・特集　大人もハマる！社会科面白教材　発掘の基本スキル